

---

## 北部九州における過去10,000年間の環境変遷：とくに海岸線の移動について

下山正一\*1・西田 巖\*2

有明海の湾奥での潮位差は最大5～6mに達し、全国最大である。大きな満干差は少なくとも約8,000年前から生じている。海進とは海面が上昇して海岸線が陸側に向かって前進する現象をいう。日本では約1.5万年前からの海進を縄文海進と呼んでいる。

縄文海進がピーク付近に達すると、潮位差が最大になり、有明海沿岸の低地では強い潮流による海底の堆積物の巻き上げが卓越するようになった。各河川では海域の泥が大量に河口部を逆流してリーチングを受けながら運搬され、逆流限界付近で堆積したので、海岸線の背後に広大な低平地が形成されたと考えられる。佐賀平野では7,000年前に海進最盛期に達し、海域が最大になった。この時期は完新世の最高海面期よりも1,000年も早い。7,000年前以降は海退期となった。海退に伴って、浮泥の堆積領域（アシ原）も南下した。このような浮泥の堆積領域の南下は低地での人類生活圏の拡大にとって重要であった。

浮泥の堆積領域の移動は海岸線の移動とリンクしている。浮泥の堆積領域は海進期は北上し、海進ピーク時期には標高8mのラインまで達した。海進ピーク時期以後海岸線は南下したが、淡水粘土の堆積した場所は水はけの悪い湿地として残された。

弥生時代になると、湿地帯の中の部分的な高まり、特に砂州の上に生活地が現れた。しかし湿地帯そのものの開拓は組織的に行う必要があった。平安時代には開発失敗の記録が残っている。さらに海域に近い湿地帯の開拓には水害や塩害への対策が必要なので、中世以降のクレーク網の整備とあお取水が耕地化の切り札となった。

\*1九州大学理学部地球惑星科学教室

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Department of Earth and Planetary Sciences, Kyushu University 33,  
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku Fukuoka, 812-8581 Japan

\*2佐賀市教育委員会

〒840-0803 佐賀市栄町1-1

Department of Buried Cultural Properties, Board of Education of Saga City,  
Sakae-cho 1-1, Saga, 840-0803 Japan